



水道料金はなぜ高いのですか、という問合せをいただくことがあります。本来、水道事業というものは、水道料金でまかなうしくみになっており（これを独立採算制と言います）、この中から人件費や施設の維持管理費、受水費等の支払いをしてゆく訳ですが、自然の水を安心してみなさんに飲んでいただくためには、多くの経費がかかります。昭和五十七年度の決算からみた水一立方メートルあたりのつ

### 疑問に答える⑤

## 上水道

水道料金はもつと安くならないものか

くり値は四百九十一円にもなりませんが、実際はそれより大幅に低い料金（百六十五円）でお届けしている訳です。ところで、みなさんの家庭では一カ月の使用料はどのくらいですか？ 図でおわかりのように、山武水道に加入している世帯のうち、基本水量以下（五百円）の家庭が非常に多いため、料金収入が全収入の三四・九パーセントしかなく、これだけではとても経営が成り立ちません。このため、構成市町村や県が多額の補助金を出していますが、それでもなお、支出が収入を大きく上まわってしまい、五十七年度末の累積赤字が三十八億円あまりにもなっています。このままでいきますと赤字をこれ以上増やさないための対策として、料金改訂を検討せざるを得なくなりませんが、何よりも収入源となる水道料金の増収が必要であり、そのためには衛生的で安全な上水道をみなさんにもつとたくさん使用していただくことが、水道事業の安定経営につながるのではないのでしょうか。

## 寺小屋名主とその弟子(下)

「鳥喰下から嫁や婿をもらうと字が読めるし、手紙も書ける。」と喜ばれる庄屋の市原義房さんは権力を持つ「名主さん」と呼ばれるより、「お師匠さん」と呼んでくれる若い人達の方が可愛くてなりませんでした。「郷土の栄えは良い若者を育てること。」これが信念だったのです。運命のいたずらでしうか、若者を愛する義房先生は子宝に恵まれませんでした。「何処の子供皆我子と同じである。出来ればこの教子の中から、自分の意志を継げる若者を養子に迎えよう。」そうした先生の目に止ったのが、近くから通って来ていた猪野家の二男忠右エ門でした。

鳥喰下から嫁や婿をもらうと字が読めるし、手紙も書ける。と喜ばれる庄屋の市原義房さんは権力を持つ「名主さん」と呼ばれるより、「お師匠さん」と呼んでくれる若い人達の方が可愛くてなりませんでした。「郷土の栄えは良い若者を育てること。」これが信念だったのです。運命のいたずらでしうか、若者を愛する義房先生は子宝に恵まれませんでした。「何処の子供皆我子と同じである。出来ればこの教子の中から、自分の意志を継げる若者を養子に迎えよう。」そうした先生の目に止ったのが、近くから通って来ていた猪野家の二男忠右エ門でした。

市原義房先生の眼に止った忠右エ門は、同じ鳥喰下の猪野家の二男でした。猪野家は当時既に名字を許される家柄でしたし、忠右エ門は義房先生の弟子の中でも抜んでの利発さと篤実さを持つ好青年で、義房先生を心から尊敬しておりましたので躊躇なく市原家の養子に迎えられたのです。



惟式先生の墓碑

名主様としての家柄であり、恩師としての市原家に迎えられた忠右エ門先生は「教子の中から選ばれた。」という誇りを心の奥に刻み付け、「自分は名主の後継者であると共に恩師としての義父の意志を継承しなければならぬのだ」と、読み書き算盤の他に、人としての踏みべき道や俳句等の手ほどき等も行ったりしました。勿論自分もそうした知識を得るために精進を続けましたので教子の数は益々増え、その範囲は、東は下総の木戸川、西は上総の木戸川の辺りまでに及びました。広いと言っても民家の座敷ですから入れる人数にも限りがありましたし、義房先生や真福寺の住職の奨めもありましたので、座敷の敷居の仕切りを取拂って教室を作り、机等も整えて正式に寺小屋としての授業所を開きました。

名主の勤めは養父の義房先生が行ってくれましたので、忠右エ門先生は「恩師の子として学問に専念出来る身」の幸せを欣んでいました。不幸にも先生もまた子宝に恵まれませんでした。その頃、隣村栗山村から通って来ていた二人の青少年がありました。一人は既に師匠代理をする青年で、後に市原家の養子に迎えられ、玉沢と称した人です。後継者も決って安堵された先生は、嘉永四年（一八一五）黒船来航以前の五月、五十八才の生涯を閉じられました。先生逝かれた後、安政五年に三百余名の教子が追慕のために建立したのがこの碑だという訳です。

町文化財審議会委員  
小沢春光さん寄稿

明治九年十一月佐伯老斐撰「文書」と刻まれています。そしてこの碑が、寺小屋師匠から脱皮して、真の教育者として大成した恩師の功績を教えてくれていることを考えるとき、その子弟の縁の深さが、しみじみと思ひ浮ぶのです。